パンフレット（両親指導の手引き書）のすすめ

今号から私たちの親の会が発行し、普及に努力しているパンフレット（両親指導の手引書）を、「ことばの教室」を担当しておられる全国の先生や関係者に紹介していただきます。ご期待ください。

吃音に関する指導書
「どもりについてのQ＆A」（神山五郎先生）
「もしお子さんがどもったら」（長澤泰子先生）
「子どものどもりQ＆A」（長澤泰子先生他）
「ぼくときどきどもるんだよ」
（イルコ・デ・ギース著）

紹介者・岡山県高梁市立高梁小学校
「ことばの教室」担当　片岡一公先生

吃音の原因は現在でもきちんと特定されておらず、吃音に関する臨床のあり方にも様々な立場があります。私は自分の指導方針として、吃症状の変化のみに一喜一憂するのではなく、吃音をもちながらも、自分らしく生き生きと暮らしていくことができるように支援していくことが大切だと考えています。

私の吃音臨床に大きな示唆を与えてくださった愛媛大学の故水町俊郎先生から「自分は吃音者ではないということを謙虚に自覚することが大切である」とうかがったことがあります。吃音のある子ども達に寄り添う立場にいながら、得てして忘れてしまいがちなことであるような気がします。一人ひとりの吃音のタイプが千差万別であるように、吃音への向き合い方もまた人それぞれ。私たち臨床家は努力することで、吃音のある方々や子ども達の気持ちに近づけるかもしれませんが、完全に重ね合わせることは、不可能だと言う謙虚さを持ち合わせなければなりません。

「親の会」から出版されている指導書を読んでいると、水町先生のことばを思い浮かべる個所があります。それは神山先生がご自分の吃音と向き合いつつ生きてこられた軌跡が綴られた一節（指導書①）です。吃音とどう向き合い、どう生きていくのかということが、先生のご経験をもとに分かりやすく記述されています。例えば、吃音者でない私が中途半端に吃音を語るより、そのくだりを親御さんと一緒に読み合うことの方が、吃音をもちながら前向きに生きていくことのイメージをはるかにもちやすいと思います。

吃音に関する指導書は全4冊。左記のとおりです。

吃音臨床の立場が様々であり、吃音の有様も千差万別であることから、指導書の内容のすべてを臨床に生かしていくというよりも、子どもさんや親御さんの状態に応じて、必要な部分をいっしょに読み合ったり、資料として提示したりという「切り売り方式」で利用するのがいいのではと考えています。どの指導書も短いセッションで区切って読むことができ、通級指導の際の短い懇談などの時間にさっと読み合うにはちょうどいいと思われます。何と言っても１冊の単価が300円（「ぼくどもるんだよ」は800円）と安価で、数冊まとめて購入し、ことばの教室に備品として置いておくことも可能です。親御さんとの学習会でみんなが一冊ずつ手に取って読み合うこともできます。

子ども達が、吃音をもちながらも、自分らしく生き生きと暮らしていくことができるようにするために、価値ある情報はみんなで共有していくことが大切だと思います。

次号からの「指導書のすすめ」も読者の側から非常に楽しみにしています。